

# 高校国語教育

2017年(夏)号

三省堂

## 〈平成30年度改訂新刊教科書特集〉

新教材作者・著者エッセイ

ヤマザキマリ「楽しみだった国語の授業」… 表紙裏

宮下紘「記憶と忘却」… 1

松田青子「よく聞け」… 2

飯間浩明「風もないのにヒラヒラヒラヒラ」… 3

現代文B・古典B 改訂版 新教材のご紹介… 4

## 〈これからの国語教育に向けて〉

深く学ぶ〈からだ〉を育てる国語 齋藤祐… 6

ICTの取り組み

— 学校教育とことば 飯島崇史… 8

漢文エディタ・

デジタル教科書のご案内… 巻末





## 楽しみだった国語の授業

今思えば国語は得意と言える科目だった。得意、というより他の科目に比べて授業姿勢が積極的だった、と言うべきか。幼少期から活字への思い入れが強かったし、作文や詩を書くのも大好きだった。既に絵を描くことは自分にとって欠かせない表現手段でもあったけど、やはり活字には活字でなければ為せない技があることにも気付いていて、実家には未だに小学校の低学年のころ私が作った紙芝居や、挿絵付きの創作文が収められた段ボールが残っている。

先日久々にその中味を物色していると、小学校一年生の時の国語のテスト用紙が現れた。そこには、当時教科書に載っていた『どろんこハリー』についての熱心な思いが、筆圧の安定しない文字で綴られていた。この物語は教科書で読むだけでは飽き足らず、後に母親から挿絵の入った本を買ってもらったのを覚えている。

中学校になると、当時放送部の顧問だった国語の教師から、一ヶ月に数回、彼の選んだ短編を昼食時の放送で朗読することを頼まれた。教科書の中の文章とはいえ、面白いものがあればそれを「教材」という枠から解放させたいという思いが溢れて、授業中の朗読はいつでも真剣だった。時には感情を込め過ぎて生徒達に笑われる事もあったが、教師はそんな私の心情を見抜いて校内放送の朗読を依頼したのだろう。教科書にも採用されていたO・ヘンリ『最後の一片』は、自分でも読みながら泣きそうになったのを覚えている。

私にとっての国語のように、ひとつの教科に本質的な興味が芽生えると、それについての教科書や授業という制約はもどかしいものになる。でも、優れた教科書や授業というのは、まさに生徒達をそんな思いに駆らせる要素を持ったもののことをいうのだろう。



### ヤマザキマリ

漫画家。作品に『ルミとマヤとその周辺』『テルマエ・ロマエ』、エッセイに『世界の果てでも漫画描き』、『国境のない生き方：私をつくった本と旅』などがある。



## 宮下 紘

[みやした ひろし] 法学者。プライバシーや個人情報保護をめぐる諸問題について研究と提言を行っている。著書に『個人情報保護の施策―「過剰反応」の解消に向けて』『プライバシー権の復権―自由と尊厳の衝突』などがある。

「文章（ぶんしょう）」という名の先生が高校一年のときの現代文の先生だった。

「文章」という名にふさわしく、先生は背筋を伸ばし滑舌よく大きな声で文章を読み、先生の厳しい授業で教室が常に緊迫した空気に包まれていたことを「記憶」している。

しかし、文章先生の授業の内容がどのようなものであったかについては、正直を言っても、「忘却」の川に流されてしまった。不思議なことに、人間は、人生の限られた時間の中で「記憶」と「忘却」を繰り返すことで成長していく生き物である。

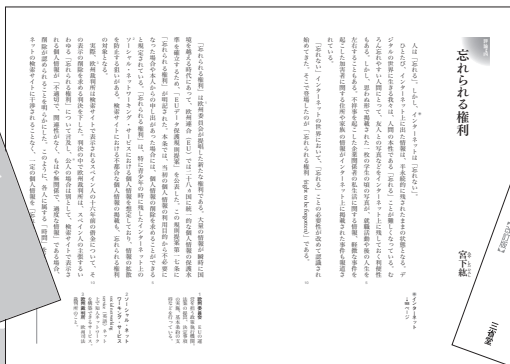
昨日のランチに何を食べたかすら、「忘却」されてしまうことがある。しかし、毎日ランチを写真でスマホに収めておけば、人工的に「記憶」されることとなる。人間の本性である「忘却」と技術の革新がもたらした「記憶」との緊張関係の中に今を生きる私たちはおかれている。

これから先、「忘却」という人間の本性を克服するために、人間のすべての行動を記録するような「記憶」の技術が開発された時、人間は幸せになるだろうか、あるいは人間に息苦しさをもたらすことになるだろうか。

戦争や暴力による支配といった人類がかつて経験してきた失敗は後世にも語り継がれるべきであって「忘却」されてはならない。他方で、私生活を含め人間のすべての行動が「記憶」されることになれば、私たちが息継ぎすることができる空間がなくなってしまうかもしれない。

「記憶」と「忘却」のせめぎあいの中で、私たちはどのような将来に向かおうとしているのか。その分岐点に差ししかかっているように思う。

## 記憶と忘却



## 松田青子

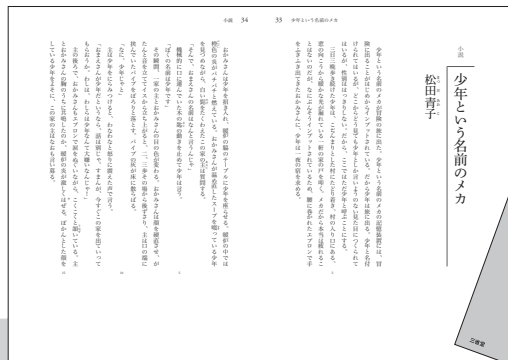
〔まつだ あおこ〕小説家・翻訳家。話し言葉の調子を生かし、日常に寄り添いながらもそれらを深く捉え直す視点を含んだ作品を発表している。作品に「スタッキング可能」「英子の森」などがある。



よく考えてみたら、私は高校の二年間をアメリカのコロラド州で過ごしていたので、日本の国語の時間の思い出がありません。向こうの国語の授業は教科書がなく、日本の教科書のように、作品の抜粋が載っていて、そこだけ授業で取り上げるといやり方は一度も経験しなかった。市販の小説を丸々一冊読むか、短編集からいくつか選んで読む、という感じだった。授業で使用した作品は、必ず、はじめから終わりまで読んだ。そしてその内容とテーマなどについて話し合った。

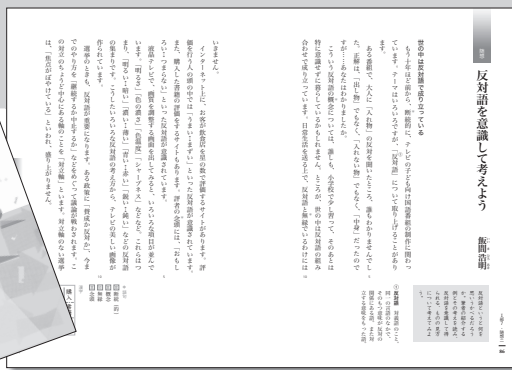
日本に帰ってきてから通った高校はちょっと変わっていた。国語の先生はほかに画家と占い師をやっている女性で、面白いので人気があり、授業中も、少人数のクラス全体で彼女としゃべっていたという記憶しかない。本は学校と関係なく読んだ。英語の先生から、私が好きそうだからと、『アリーテ姫の冒険』をもらったことを覚えている。彼女の授業で一番心に残っているのは、来日して日本のプロ野球の審判をやっていた白人男性が、彼の判定に不満を覚えた選手たちともめたことで、怒って帰国したというニュースを見せられ、どう思うか意見を求められたことだ。慣れない土地で責められてかわいそうだというようなことを生徒たちが言うと、彼女は首を振り、ニュースで流れた来日時の審判のインタビューをもう一度よく聞くようにと言った。ほら、legitという言葉がこの人は使っている。日本の選手たちに自分が教えてやるんだという気持ちだった。だから反論されて腹を立てた。他国の文化に歩み寄る気がなく、自分は教える側と思いつ込んでいるのは驕りだ、と。リスニングの授業の出来事だったのではないかと思うが、よく聞け、と私たちに言った彼女のことは忘れられない。

## よく聞け



少年という名前のメカ  
松田青子





## 風もないのにヒラヒラヒラヒラ

高校の国語の授業は覚えていない、という大人が多いようです。私は信じられなくなってますね。

もちろん、私は覚えていますよ。受けた授業を再現しろと言われたら再現できそう。まあ、それは言い過ぎにしても、けっこう細部まで覚えています。

「兼好法師は中世の人だが、それ以前の古典に詳しく、『徒然草』も古いことばで書いている。でも、ときどき同時代の言い方が出てしまうんだ」。S先生にそう聞いて、上手の手からも水が漏ることを知りました。

寺田寅彦の随筆にあった「ヘテロドックス」（異端）という語がどうしても発音できず、以後「ドックス」と略してしまったO先生。なるほど、聞き手も了解している語なら略していいわけだ、と納得しました。

高校2年の時、A先生による志賀直哉「城の崎にて」の授業で、私は強烈な体験をしました。

作品中、ある夕方に散歩していた「自分」は、大きな桑の木の下へやって来ます。そこで「ある一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている」様子を目撃します。なんでこんな奇妙な動きをしているんでしょうね。はい、飯間君。

A先生に指名された私は、「風が吹いているからでしょう」と適当なことを答えました。たちまち周囲の友だちが「えー」と声を上げる。よく読むと〈風もなく〉と書いてあります。

若い女性のA先生は「風でないとするれば、何でしょう」と重ねて質問されました。狼狽する私。無事正答にたどり着いたかどうかは覚えていません。

私が文章をざっと読むのをやめ、人の数倍の時間をかけて読むようになったのはそれからです。今でも私は本を読むのが遅い。A先生の授業のおかげです。



### 飯間 浩明

〔いま ひろあき〕国語辞書編纂者。日本語の用例を広く収集し研究しているほか、言葉に関するテレビ番組の講師や監修者を務めるなど、現代日本語全般に関心が深い。





# 深く学ぶ〈からだ〉を 育てる国語

齋藤祐

中央大学杉並高等学校



## 学びに向かう力と〈からだ〉

先日行った授業で、こんなことがありました。小説の解釈をグループ内で発表し合う場面で、聞き手役の生徒が急に、机に上体を突っ伏してしまったのです。

発表者である生徒もどこを向いて話しているのかわからずにとまどってしまえばかり。幸いにして聞き手役の生徒は複数名いましたので、発表自体は無事に済ませることができました。しかしこのとき、ある問いが立ち上がりました。生徒たちは学ぶために、さらに言うともっと深く学ぶために、いったいどんな〈からだ〉を手に入れればいいのか、と。

## 「現場の理論」の構築

昨年末、次期学習指導要領に関する審

議のまとめが中央教育審議会から文部科学大臣に答申され、それに続いて本年三月、小学校・中学校の「学習指導要領」が告示されました。いよいよ学校現場にも「主体的・対話的で深い学び」という、新たな波が押し寄せようとしています。

京都大学の溝上慎一教授は、政府の施策文書や学術的な理論を、概念化・理論化された「グランドセオリー (grand theory)」であるとした上で、これからの学校現場に求められる作業は、理論と実践とを往還しながら「現場の理論」＝「グラウンデッドセオリー (grounded theory)」を構築することだと述べています (溝上慎一「現場の改革につなげよ——学習指導要領改訂(案)に対するコメント」)。

「グランドセオリー」ではなく「グラ

ウンデッドセオリー」の構築のためには、文字通り地に足のついた実践の積み重ねが不可欠です。さらに言うくと、地のついた実践の積み重ねのためには、目の前の生徒たちの〈からだ〉のありようを丁寧に観察し、学びへと向かう〈からだ〉づくりの方法を考えることが求められます。これからの「現場の理論」構築のためには、教室における授業が、生徒の主体的・対話的で深く学ぶ〈からだ〉づくりのように貢献できるのか、という点について今一度考えることが必要なのではないでしょうか。

## 「ことば」も〈からだ〉

ここでいう〈からだ〉とは、あくまでも行動の主体としての〈からだ〉のことであり、〈身〉としての〈身体性〉のことです。もう四十年以上前のことになりましたが、演出家の竹内敏晴は、〈ことば〉もまた〈からだ〉であり、〈からだ〉なしにいかなる〈ことば〉も生まれないと述べました。

《ことばは意識的操作として発せられるものではなく、食べるとか眠るとか同じように、無意識にうながされて発する



動作であり、意識は、あとからそれをコントロールするだけにとどまる。これが主体としての人間にとつてのことばの本来的あり方だろう。とすれば、ことばもまた「からだ」としてとらえられねばなるまい。《『ことばが劈ぶかれるとき』ちくま文庫》

話し言葉はまず何よりも他者への働きかけであり、声を発する衝動が（からだ）のなかに生まれなければならないのです。このことは、これからの「主体的・対話的で深い学び」へのヒントになると思います。

冒頭で紹介した生徒に「きちんとしなさい」と告げることは簡単です。しかし、新しい学習指導要領に基づいた授業運営は、「教員」ではなく「生徒」が主役となるものです。考える主体としての（からだ）を育てようとするとき、生徒に気づかせるための方法は変わってくると思います。その方法を模索することが必要なのではないのでしょうか。

## つながり・深掘り・ふりかえり

それでは、「主体的・対話的で深い学び」のためには、どのような衝動が（か

らだ）のなかに育まなければならないのでしょうか。

試みに、新しい学びのための基点を（からだ）に置いたうえで、さらなるキーワードを三つ考えてみました。その三つとは、〈つながり〉と〈深掘り〉と〈ふりかえり〉です。

〈つながり〉とは、これまで学んできたことと今学んでいることのつながりに気づくこと。既知の情報と未知の情報とを関連づけることです。この〈つながり〉に気がつくことができれば、一見無関係なものを結びつけ、情報のすきまを埋めることができるようになります。

〈深掘り〉とは、ひとつのテーマを掘り下げて本質をつかまえ、さらなる気づきをもたらすこと。学んだことをふまえて新しい「問い」に出会い、さらなる探究のサイクルへと自身を導いてくれます。（ふりかえり）とは、学びを俯瞰し、自己のありようを見直し、次の学びへの動機づけとすること。学ぼうという意欲は、何もせずじつとして生まれくるものではありません。未知のものに出会い、異なる位相を結びつけ、ある一点を掘り下げようと試みる過程で、生徒たち（からだ）は学びへと向かっていきます。

## 教室という〈場〉の役割

他者の（からだ）のありようを通じて、自己の（からだ）もつくられていきます。仲間とともに学ぶことを通して、生徒は他者に対する（からだ）のありかたにも気づいていくでしょう。そのとき、授業者の立ち位置が問われます。発表者である生徒に、相手がどのような意見を持っているのか、耳を傾けさせてみる。そして、相手に向かってどのような言葉を発すれば良いか考えさせてみる。こうした、生徒自身にメタ認知を促す問いを発することが、授業者に求められていくのではないのでしょうか。

他者へとひらかれた（からだ）は、豊かな〈ことば〉を内包しています。その〈ことば〉を発することのできる場として国語の教室をデザインすることが求められています。

これから必修科目が「現代の国語」と「言語文化」へ、選択科目が「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」へと大きな再編を迎えます。しかし、科目の名前が変わっても、私たちにできることの本質は変わらないのだと信じています。

# ICTの取り組み

—学校教育とことば

飯島崇史

明星中学校・高等学校



## 1 はじめに

ICT教育をどう進めていくかの議論が闊達だ。中央教育審議会（以下、中教審）からの答申に従い、本年度次期学習指導要領の改訂がどの校種においても終了する。

近年の学習指導要領で特筆すべきは『学習の方法』に焦点が与えられている点ではないか。現行の学習指導要領で「ICTの利活用」が強く打ち出されたのに続き、次期学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が標榜される。中教審の答申でも「『知識の質・量の改善』に加え、『どのように学ぶか』という学びの質や深まりを重視すること」とあり、新

しい教育手法への挑戦と転換を訴えている。それまでの議論が「脱ゆとり」「生きる力」といった概念、「科目名」の改変に注目が集まっていたことを考えると、ここ二回の改訂で「ICTを使いつつで主体的に対話的に学習」という『学習の方法』の方向性をはっきりと打ち出されたと言える。

## 2 本校の取り組み

本校は中高並列型一貫校である。現行の学習指導要領にあわせ、二〇一五年度より中学三年生と高校一年生の二学年でタブレット型PC（以下、タブレット）の一人一台所持を始めた。二年間の試行錯誤の中で、全校をあげてICT環境が整った。

授業内でのICTの使い方は年毎に深化している。一年目は「教材の電子黒板への投影」などが中心でやや遠慮がちに進んだものの、徐々に「教材のペーパーレス化」「生徒へのインフラの確立（生徒への\*ユビキタスの連絡ともいうべき）」と進み、二年目の昨年度は「双方向的な授業」の取り組みも盛んになってきた。



タブレット一人一台

そしてそれが学力向上という形で実を結び始めている。

私自身も授業でタブレットとアクティブ・ラーニングの相性は非常に良いことを実感している。この二つを組み合わせると生徒は考えることが増え、聞くことが減る。頭を使う顔に創造的なことをしている充実感がうかがえる。しかし、その一方で内心「国語」はICTに向かないのでは」とか「アクティブ・ラーニングをする」と進度や定着は本当に大丈夫か」と巷間で言われることの心配が消えることはない。

さて、そこでどんな風にタブレットをアクティブ・ラーニングと組み合わせているのか、私自身の授業の取り組みを二点あげたい。

\*ユビキタス

いつでもどこでもコンピュータネットワークで生活が結ばれていること。例えば、ここでは授業内での言い忘れ、長期休暇の宿題の変更や追加、修正などが可能であるということ。

### 3 タイムラインで学習

一つ目はほぼ毎時間行っている取り組みである。それは、授業中の「挙手の代

わり」に自分の考えや意見などを学習用アプリケーション上にグループを作り、タイムライン上に「UP」させることだ。単純だが、生徒は意外と「考えること」「表現すること」を真剣に取り組む。手順を以下に示す。

- ① 「教師の発問」(指示)
- ② ネットワーク上への書き込みやPDFでの提出
- ③ 生徒相互の閲覧、共有。
- ④ 時にリアルな場での意見交換。

特に高校の授業においては、自分の意見を言う場や自分を表現できることで学びの広がりや楽しさ、そこから生まれる他者からの評価を共有しあえる。そうすることで主体的な学習雰囲気生まれやすい。旧来教授者と生徒個人の間で止まっていた知識や思考の共有がクラス同士のネットワークになる感じだ。いろいろな意見が出た中で本筋ではない意見や未成熟な表現は、他の生徒の書き込みを見ながら主体的に編集、修正されていく。また、理解が足りない生徒は自分が理解できる範囲の生徒の書き込みを足がかりにし、思考が一步進む。「読書会」で自然に理解が深まっていく感じに似て

いる。また、この方法は机の位置を変えたり、グループになったりしなくても、バーチャルな場が作れるので、一斉授業からグループ学習に移る際に生まれる「机の移動」がないので旧来授業とも並存しやすい。

この方法は文科省が標榜する「主体的、対話的な学習」や「思考力・表現力の向上」に合致する。またリテラシー能力とは一般的には情報収集能力(下りDOWN)という意味に使われている。タブレットの活用の際もそちらに意識が



タイムラインでグループ学習

いきがちだ。しかし授業内では情報収集能力より情報提示能力こそがリテラシーを高めると実感している。

今後BYOD (Bring Your Own Device) —自分のスマートフォンなどの授業活用) という形式が広がれば手持ちのスマートフォンやタブレットをたやすく授業で活用できる。ただし、中学生では思春期初期の「見られること」への気恥ずかしさがある。自分の意見や考えをタイムライン上に「UP」することを嫌がる生徒が多いので発問の段階を作ったり、書き込みの前段階で二人くらいで話し合いをさせたりするなど工夫も必要であったことを付記する。

#### 4 難熟語をPBLで学習

二つ目に話題を移す。高校生の「現代文難熟語」をどう扱うかは頭の痛い問題だ。『難熟語集』の出版数が増えたことからこのことは私だけの悩みではないように思う。「漢字」や「英単語」のように授業の中で小テストによって計画的に扱う方法を継続してきたが、必然対訳的になりやすい。

私自身、語彙は「思考のセル(細胞)」のように感じている。その場に感じたいわば有機的な活用をさせる必要がある。

であれば、語彙を対訳「ばかり」で覚えてしまおうと読解の時逆にも迷うことも多くなる。それは文章はコンテキストの影響を受けるのに、覚えた対訳にしばらく受けて解が硬直化してしまうからであろう。さらに、文章の中では修辭学の転義法のようなことが一語、一語単位で絶えず起きていると感じることもある。例えば高校の現代文で類出の「デジタル」という言葉を例にとる。手元の難熟語集には「文字や情報を信号に変えて表す」というようなことが対訳的に書かれている。

しかしこの訳を知っているよりはむしろ「機械的」「冷徹に」「非連続」という意味に\*シネクドキ (synecdoche) 的に転義させたほうがよい。対訳は必要と認めつつ、ある程度の包摂で対象を概念化していくこともまた文章読解では必要である。近年取り扱い増加傾向にある哲学的用語などは特にテクニカルターム(術語)として捉える必要は少なく、語のニュアンスを掴ませ、使わせることで概念が定着していく。

そこで、難熟語四〇〇語句程度を抜き出し、それをタブレットを使って四〇〇語彙をPBL (Project Based Learning) 形式で学習させてみることを高校一年生のかかなり早い時期に行った。

以下手順を示す。

- ① グループ学習で班の中での自分の責任範囲を決め語句を調べる。
- ② 責任の語彙をタブレットを使い「自分なりに」理解する。  
(この時には検索サイトを使い、なるべくハードルの低い表現や理解しやすい表現を見つけることがポイント)
- ③ それを自分の言葉で表現、解釈し直す。
- ④ 自分の責任範囲の語をレポートにまとめる。
- ⑤ 学習者相互で調査語句のまとめレポートをタブレットの写真で撮り共有する。
- ⑥ わからない語句について相互学習する。
- ⑦ 重要だと思ふものの対義語、同義語など付帯する知識を学習アプリケーションのタイムラインに上げクラスで共有する。

J.Piagetの認知・発達理論や最近すっかりアクティブ・ラーニングの根拠として定着してきたラーニング・ピラミッドなどに依拠すれば、(一) 解釈した知識

を再構成すること(二)わかりそうではないことをわかっていくこと(三)能動的に取り組むことが知識の定着には有用であるようだ。その要素をデザインしたのがこの語彙獲得PBLである。生徒の反応は上々であり、今後継続していきたいICT活用の授業方法となった。

\*シネクドキ

修辭技法、上位概念を下位概念、下位概念を上位概念で包摂すること。

## 5 デジタル教科書の可能性

これらの取り組みのコンセプトはそも



難熟語をPBL形式で学習

そも紙媒体ではできないことをICTで行いタブレットの活用の有用性を見出すことだ。そのためには、思考のきっかけや補助になってこそ、タブレットを使う意義があると言えるのではないだろうか。これらの授業内の取り組みや経験をきっかけとして、日々の授業や家庭学習で、思考、表現、判断をタブレットを使いながら繰り返すことが、能動的学習態度の涵養につながると考える。その意味において以下のようなデジタル教科書が一日も早く出現することを期待して拙文のまとめとしたい。

それは「基礎的・基本的な知識・技能の習得」のために「聞くこと」「考えること」をしながら「読むこと」のできるデジタル教科書だ。

具体的には音読の音声ファイルをタブレットやデバイスに配信、インストールできるようにする。これだけでも教室内で行ってきた「音読」が個人で可能になり、漢字の読み書きはもちろん、見落としがちな「聞く」ことで文章を再構成したり、古典のリズムを反復することができる。さらに音読練習の自動採点やチェックなどもそれほどの時を経ずにできるのではないか。紙の教科書にはないデジタル教科書としての価値となる。

また本文に空欄や言語選択ができるようなアレンジ機能がついていたらどうだろう。こうなれば、例えば文脈から接続詞や修飾語句を考えさせて「読む」ことができる。また、登場人物の名前や感情語が空欄になっていれば文脈を追う力になる。初読に適するだけでなく、昨今文章読解にはやりの「ランゲージアーツ(Language arts:言語技術)」的な学びがそこに広がりそうだ。この二つがデジタル教科書に付与されるだけでも「漢字の読み方」から始まり「文脈の構成」を考えることになりPISAで話題になった「読解力」をどうつけるかという課題解決への糸口になりそうである。

かようにも教材のICT化は可能性を秘めている。「紙なのか電子なのか」という一元論的な議論は不毛である。むしろ教材は紙、教具は黒板とチョークしかなかった時代からたくさんの指導ツールが選択できる時代が始まり、広がりを見せているように思う。そう考えると、教育の実践の中で何割かでもICT化を授業デザインすることで、思考の深化、表現する機会の顕在化、能動性による判断力の向上など、紙だけではできなかったことを生徒が掴んでくれることを信じてやまない。

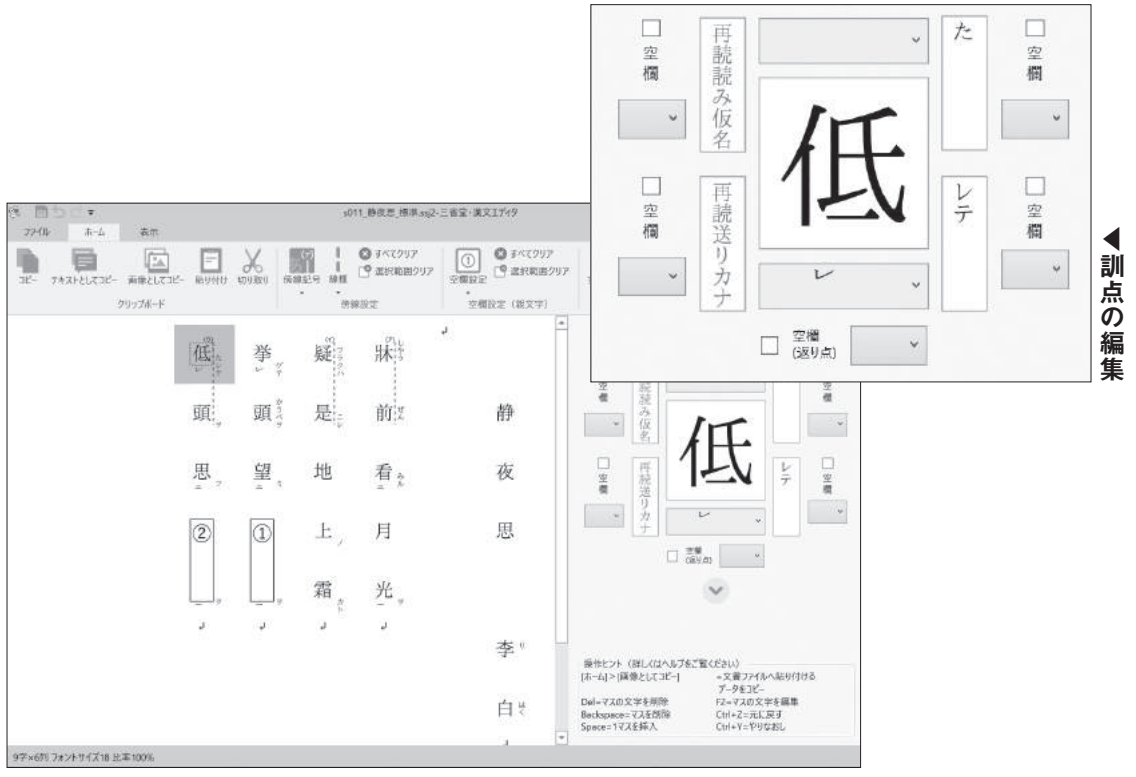
# 漢文エディタ

◆「漢文エディタ」は、訓読文や漢文テストの問題文を編集するためのソフトです。

## 主な機能

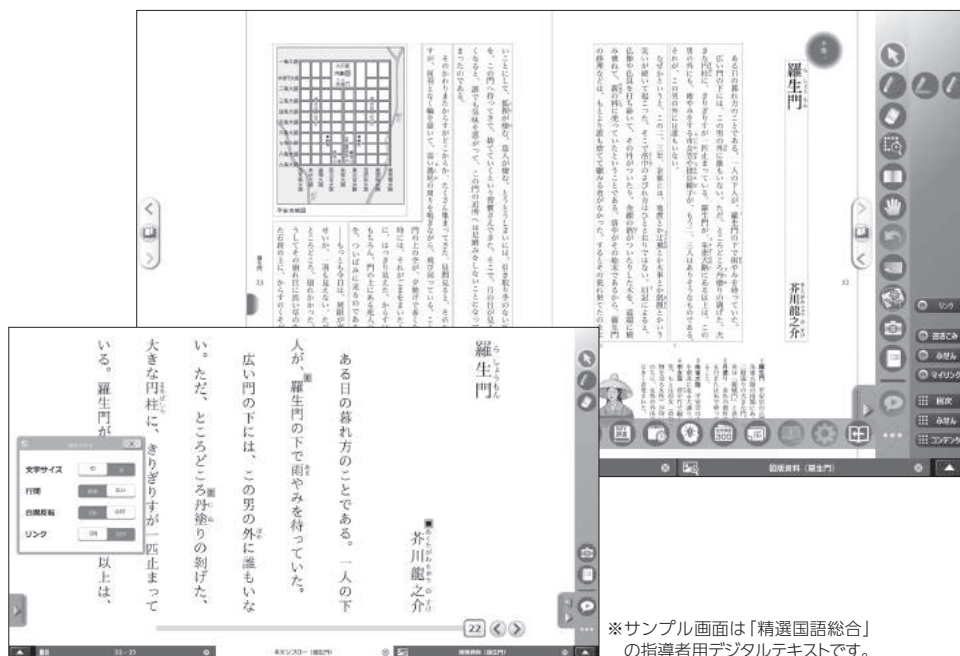
1. 訓読文を編集する(漢文特有の「訓点」の編集)  
漢字一字ずつに、読み仮名・送り仮名、返り点を設定することができます。再読文字にも、同様に設定することができます。
2. 問題文を編集する  
訓読文の任意の箇所に、傍線や空欄を設定することができます。空欄は、訓点にも設定することができます。
3. ワードや一太郎のデータに貼り付ける  
作成した訓読文や問題文を、ワードや一太郎のデータに貼り付けることができます。

\*教科書採録教材の対応データを同梱しています。  
指導書付属CD-ROMには、教科書掲載の訓読文と「評価問題」の問題文の「漢文エディタ」対応データを収録します。個々の教室に合った訓読文、問題文の編集をすぐに始めることができます。



◀ 訓点の編集

## 指導者用デジタルテキスト



## 教科書の内容を最大限に活用すること

デジタルテキストでは、教科書本文の拡大提示、付録や図版資料のインデックスおよびその拡大提示など、教科書の内容を提示用の素材として、最大限に活用することをコンセプトに製作いたしました。

## CoNETSビューア

平成29年度版からは教科書会社12社が参画して開発した共通プラットフォーム CoNETS ビューアでのご利用になります。

●動作環境 **指導者用** (2017年4月現在)

Windows版	
OS	Windows 7 SP 1 / Windows 8.1 / Windows 10 (32bit / 64bit 対応) <sup>※1</sup>
ブラウザ	Internet Explorer 11
CPU	Intel Core i3以上推奨
メモリ	4GB以上
空き容量	4GB以上(ビューア1GB+教材3GB)
モニタ	True Color(32bit) <sup>※2</sup>
その他	.NET Framework 4.5以降 Aero設定: ON <sup>※2</sup>

※ Microsoft, Aero, Internet Explorer および Windows は、米国 Microsoft Corporation の、米国およびその他の国における登録商標または商標です。

※1 Windows RTには対応しておりません。

※2 Windows 7の場合のみ。

動作環境や導入にあたっての条件等は、CoNETSのWeb サイトにて最新の情報をご確認ください。 <http://www.conets.jp/>

学習者用デジタルテキストなどのその他の製品を含め、各特徴や動作環境などの詳細な情報は三省堂教科書・教材サイトをご覧ください。

●体験版 DVD-ROMのお申し込みは eメールにてご連絡ください。  
eメールアドレス: info-tbdt@sanseido-publ.co.jp

三省堂教科書・教材サイト

<http://tb.sanseido.co.jp>



## 三省堂の辞書



ことばの本質をとらえる国語辞典の決定版!  
日本でいちばん売れている小型国語辞典!

### 新明解国語辞典 第七版

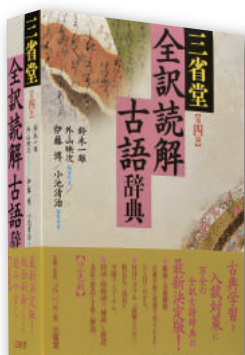
山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・  
井島正博・笹原宏之[編]

B6判 1,728ページ ISBN 978-4-385-13107-8  
定価(本体3,000円+税)

進化を続ける「小さな大漢和」!  
100万部を突破した漢和辞典のベストセラー  
最新改訂版!

### 全訳 漢辞海 第四版

戸川芳郎[監修] 佐藤進・濱口富士雄[編]  
B6判 1,984ページ ISBN 978-4-385-14048-3  
定価(本体3,000円+税)



古語の大海原を航海していくための名ガイド!  
古典学習に最適な全訳古語辞典の最高峰、  
充実の最新改訂版!

### 三省堂全訳読解古語辞典

【第四版】

鈴木一雄・外山映次[編者代表] 伊藤博・小池清治[編集幹事]  
B6判 1,472ページ ISBN 978-4-385-13341-6 定価(本体2,800円+税)

★三省堂教科書・教材サイト

<http://tb.sanseido.co.jp/>

三省堂国語教科書



三省堂高校国語教育 2017年夏号

2017年6月15日 発行

[編集・発行人] 北口 克彦

[発行所] 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2丁目22番14号

電話/03(3230)9411(編集)・9412(営業)